豊島岡女子学園・理科化学問題のくわしい解説

すぐる学習会

平成22年第2回

- | 2 | 問題を解く前に、問題文を読んでわかることを分析し整理しましょう。
 - 【反応①】 石灰石の主成分は炭酸カルシウムです。 また、塩酸の中には塩化水素が溶けています。 反応①を反応式にすると、次のようになります。

反応前の重さの和は 100+73=173 (g) です。 反応後の重さの和は 111+18+44=173 (g) です。 反応前と反応後の重さの和は、ちゃんと等しくなっています。

【反応②】 石灰水の中には、消石灰(水酸化カルシウム)が溶けています。 二酸化炭素を通じると白くにごりますが、このにごりは炭酸カルシウムです。

> 炭酸カルシウムは水に溶けないので、液が白くにごったのです。 反応②を反応式にすると、次のようになります。

反応前の重さの和は 74+44=118 (g) です。 反応後の重さの和は 100+18=118 (g) です。 反応前と反応後の重さの和は, ちゃんと等しくなっています。

【反応③】 Aは反応①でわかった通り、炭酸カルシウムです。

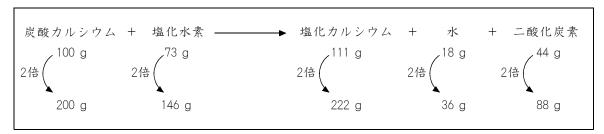
炭酸カルシウム100gを加熱すると、生石灰が何gかと、二酸化炭素が44gできました。

反応前の重さの和と反応後の重さの和は同じになるので、生石灰は 100-44=56 (g) できました。

反応③を反応式にすると、次のようになります。

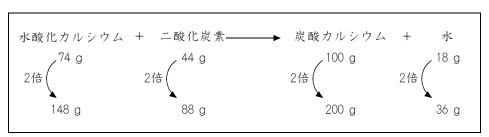
これらの反応式を利用して, 問題を解いていきます。

- (1) A は炭酸カルシウムですから「 $\stackrel{1}{\sim}$ 」,B は塩化水素ですから「 $\stackrel{1}{\sim}$ 」,C は水酸化カルシウムですから「 $\stackrel{1}{<}$ 」です。
- (2) まず、炭酸カルシウム(A)200gと、塩化水素(B)146gを反応させます。 次の通り、炭酸カルシアムも塩化水素も反応式の2倍ですから、反応によってできる塩化カルシウム・水・二酸化炭素も2倍になります。



さらに、塩化カルシウム(C)148gと、上の反応によってできた二酸化炭素88gを反応させます。

この反応も、次の通りやはり2倍になっていますから、反応によってできる炭酸カルシウム(A)・水も2倍になります。



よって、塩化カルシウムは 222 g 、炭酸カルシウム(A)は 200 g できることになります。

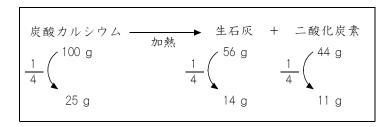
(3) 22.4 L の二酸化炭素は44gです。

5.6 L は 22.4 L の $\frac{5.6}{22.4} = \frac{1}{4}$ ですから、重さは $44 \times \frac{1}{4} = 11$ (g) です。

よって反応式の $\frac{1}{4}$ になるので、水酸化カルシウム(C)は $74 \times \frac{1}{4} = 18.5$ (g)必要になります。

水酸化カルシウム + 二酸化炭素 — 炭酸カルシウム + 水
$$\frac{1}{4} \begin{pmatrix} 74 \text{ g} & \frac{1}{4} \begin{pmatrix} 44 \text{ g} & \frac{1}{4} \begin{pmatrix} 100 \text{ g} & \frac{1}{4} \begin{pmatrix} 18 \text{ g} & \frac{1}{4} \end{pmatrix} \end{pmatrix}$$
18.5 g 11 g 25 g 4.5 g

- (4) (3)の反応の結果, 炭酸カルシウム (A) は25gできました。
 - これは反応③の反応式の $\frac{1}{4}$ ですから、加熱すると固体である生石灰が $56 \times \frac{1}{4} = 14$ (g) できます。



(5) 30%の塩酸120gには、塩化水素は120×0.3=36(g)溶けています。

石灰石40gは、すべて固体Aであると問題に書いてあったので、炭酸カルシウム(A)が40gあると考えてOKです。

反応式とくらべると、炭酸カルシウムは $40 \div 100 = \frac{2}{5}$ (倍) です。

塩化水素は $36\div73=\frac{36}{73}$ (倍) です。

炭酸カルシウム + 塩化水素 — 塩化カルシウム + 水 + 二酸化炭素
$$\frac{2}{5}$$
 $\begin{pmatrix} 100 \text{ g} \\ \frac{36}{73} \end{pmatrix}$ $\begin{pmatrix} 73 \text{ g} \\ \frac{36}{73} \end{pmatrix}$ $\begin{pmatrix} 111 \text{ g} \\ \frac{36}{73} \end{pmatrix}$ $\begin{pmatrix} 18 \text{ g} \\ \frac{36}{73} \end{pmatrix}$ $\begin{pmatrix} 44 \text{ g} \\ \frac{36}{73} \end{pmatrix}$

$$\frac{2}{5} = 0.4, \frac{36}{73} = 0.49 \cdots$$
 ですから、倍率が小さいのは $\frac{2}{5}$ の方です。

倍率の小さい方に合わせるので、反応式は次のようになります。

炭酸カルシウム + 塩化水素 — 塩化カルシウム + 水 + 二酸化炭素
$$\frac{2}{5}$$
 $\begin{pmatrix} 100 \text{ g} & \frac{2}{5} & \frac{2}{5} & \frac{2}{5} & \frac{2}{5} & \frac{2}{5} & \frac{2}{5} & \frac{44 \text{ g}}{25} & \frac{2}{5} & \frac{2$

反応後に、水が7.2 g できたことがわかりました。

しかし,答えは7.2gではありません。

なぜなら,30%の塩酸120gの中に,塩化水素を溶かしていた水があるからです。30%の塩酸120gには,100-30=70(%)の水が存在します。

 $120 \times 0.7 = 84$ (g) τ_{0}

反応後の溶液中には、はじめから存在する84gの水と、反応でできた7.2gの水がありますから、合わせて84+7.2=91.2(g)の水があります。